

この世界の片隅に

丸山 勉

[聖書] ルカによる福音書 2章 6～14 節

ところが、彼らがベツレヘムにいるうちに、マリアは月が満ちて、初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。天使は言った。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。あなたがたは、布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ。」

ルカによる福音書 15章 8～10 節

「あるいは、ドラクメ銀貨を十枚持っている女がいて、その一枚を無くしたとすれば、ともし火をつけ、家を掃き、見つけるまで念を入れて捜さないだろうか。そして、見つけたら、友達や近所の女たちを呼び集めて、『無くした銀貨を見つけましたから、一緒に喜んでください』と言うであろう。言うておくが、このように、一人の罪人が悔い改めれば、神の天使たちの間に喜びがある。」

[序] クリスマスは、天の喜びの知らせ

「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。」

これが、私たちに対する神様からのクリスマスメッセージです。「民全体に」対して、と天の御使いは言いました。「すべての国の人々に対して」と言っても良いと思います。そしてこの喜びの知らせは、よく注意していただきたいのですが、人間が見つけ出したものではありません。御使いが述べたことです。ここに、クリスマスの喜びの特質があります。誰よりもまず神様が喜んでいる、ということです。

しかしその神様の喜びとは、人間に向けられているのです。人間にとって、メシアなるキリストが与えられたこと、そのことを神様が喜び、天使に天の軍勢が加わって賛美をしているのです。天に響く大合唱。しかし、聖書はこの喜びは、実にひっそりとやってきたことを告げています。この幼子キリストはどこにお生まれになったのか？—ベツレヘム郊外の、馬小屋の飼い葉桶の中に布にくるめられて誕生したのだと書いてあります。そのことこそが神様の御心であったのです。どんな御心か。結論を言ってしましましょう。それは、どんな人間も、神様から排除される人は誰ひとりも

いない！ というメッセージです。そのことを、このクリスマスの出来事は、静かに、しかし力強く語っているのです。

[1] 失われた銀貨のたとえ話

そのことを思った時、私はこの主イエス様が語られた「たとえ話」の中の一つを思い起こしました。イエス様は、数多くのたとえ話を語り、そこで神様の、人間に対する愛が揺るぎなく確かなものであることを語ってくれたのですが、この「10枚の銀貨を持つ女性」のたとえもそうだと思います。

このようなたとえ話です。—「ドラクメ銀貨を十枚持っている女がいて、その一枚を無くしたとすれば、ともし火をつけ、家を掃き、見つけるまで念を入れて捜さないだろうか。そして、見つけたら、友達や近所の女たちを呼び集めて、『無くした銀貨を見つけましたから、一緒に喜んでください』と言うであろう。」

皆さん、このお話を聞いてどう思われますか？ 何故イエス様はわざわざ一枚の銀貨を、十枚ある中の一枚という設定で話されたのでしょうか。そこが一つのポイントだと思います。私たちは誰もが「比較」の世の中で生きています。「評価」の世界と言ってもいいでしょう。時に、自分自身が他の大多数の者たちに比べると、何とつまらない、価値のない、生きる価値がない人間だと思い込んでしまうことはないでしょうか？ 一見全く生活に困ったことが無いかのような人でも、心の中では、底知れない寂しさや、孤独を抱えることがあります。或いは、様々な人間関係に疲れ切ってしまい、もう部屋を出たくないとされる時だって私たちにはあると思います。

十枚ある銀貨の中の、暗がりに紛れ込んでしまい、そこで動けなくなっている一枚の銀貨。それは、もしかしたら、**私たち一人ひとりの人間の姿そのもの**ではないでしょうか？ 一けれども、この一枚の銀貨を、**持ち主である女の人は、とことん捜し出す**のです。当時のユダヤ人庶民の家は、窓は小さいものがあるだけであって、昼でも薄暗い室内でした。ですから、見失った一枚を探すためには、普段は高価で滅多に使わない油を使って灯し火をつけ、そして探すのです。埃まみれの隅っこの方に転がってしまっているかもしれないということで、丁寧に掃きながら入念に捜すのです。この女性にとってはまだ残りが九枚あるから、そんな面倒くさいことはやめようという気持ちはなかったのです。必死で捜した。

どうしてそこまでするのか？ 持ち主だからです。銀貨は、見つけられなければ、そのままになってしまいます。けれどもこの女性は**諦めません**でした。この一枚の銀貨も、**他の銀貨と同様、替りがない大切な一枚**。そこには、その額面以上の価値があるのです。「愛」注がれているのです。聖書が語る神様とは、あなたひとり、どこまでも愛して、価値ある者として捜し出す神様なのだ、と語っています。

そして私は思ったのですが、この話の中では、一枚の銀貨がなくなったこと、こ

れは勝手に転がったのだから銀貨のせいだ、などということはこれっぽっちもないということです。私たちの世界ではしばしば「自己責任」という言葉が語られます。

「ああなってしまったのは止むを得ないよね、本人の責任よね」ということです。現代は、その言葉が横行しているのではないのでしょうか？ けれども、このたとえ話は違うのです！ まるで、なくしてしまったのは私のせいだ、私の落ち度だ、と言っているかのようにではありませんか？ すごいことではないのでしょうか。わたしはここに、**私たちを責めない、神様の謙虚さ、大きさ**感じました。

そして、この女性は大喜びをするのですね。近所の人を集めてです。「見つかりましたあ！」って。大げさなほどです。でも、**神様という方は、私たち一人ひとりの存在そのものを、そこまで喜んでおられる方なのだ、**ということなのです。

「言うておくが、このように、一人の罪人が悔い改めれば、神の天使たちの間に喜びがある。」—「悔い改める」ということの本質は、元の所に帰る、ということです。私たちは、神様のもとから生まれ、やがて神様のもとへと帰って行く者です。この女性は、一枚の銀貨を再び手にした時に大喜びをしました。今、この女性と一枚の銀貨は一つです。そのように、私たちは本来**神様の手の中に包まれている存在、他人が何と言おうが、周りの者との競争や評価に振り回されない、安心して生きてゆける存在**なのです。クリスマス、飼い葉桶にキリストが来て下さったということは、私たちがどこにしようと、どんな環境にあらうと、キリストはそこに共にそこにおられる、ということです。

[2] クリスマス—私たちと共に生きる神様の決意

私の大好きな映画に「この世界の片隅に」という映画があります。今年テレビドラマにもなりましたが、映画が断然いいです。この史代（ふみよ）さんのコミックをアニメにしたものですが、これは、広島県呉市で、海軍隊員・周作の妻になったすすさんの、その時代に翻弄され、沢山の悲しい目に遭いながらも、自分は時々得意のスケッチをしながら、日々の生活を生き抜いてゆく、そういう人間ドラマです。けれども、その絵を描いていた右腕も、あの太平洋戦争が終わる二ヶ月前に、時限爆弾で吹き飛ばされてしまいます。一緒に手を繋いでいた義理のお姉さんの子どもは死んでしまいました。そして二ヵ月後の8月6日には、実家のある広島市で原子爆弾が投下され、両親が死に、実のお姉さんは原因不明の病気になってしまいます。

戦争という、人間の罪が極まったその吹き溜まりのような爆心地の現場をすすさんがふらふら歩いていると、そこに夫周作が姿を現します。その場所は、実は二人が最初に出会った場所だったのです。橋の上で静かに喜びをかみ締める二人。並びながらすすは言います。「この町は、みんなが誰かを亡くして、みんなが誰かを捜しとる。みんなが人待ち顔ですね」と。周作は「うん」とうなずき、「この町もわしらも変わり続けていくんじゃないだろうが、わしはすすさんは、いつでもすぐにわかる。このほくろですぐにわかるで」と、すすの頬に触れて言います。ずっと変わらなか

った周作の愛を感じて、すずは言うのです。「周作さん、ありがとう。この世界の片隅にうちをみつめてくれてありがとう。ほいで、もう離れんで、ずっとそばに居って下さい」と周作の服の袖を引きながら言うのです。

そこに、ボロボロになった服をまとい、憔悴した3~4才の女の子が近寄ってきます。その母親は、この子の手を引きながら、しかし焼けた体はとうとう力尽き、行き場の無いこの子だけが残されてしまいました。周作とすずは、顔を見合わせ、呉でこの子と一緒に生きることを決断しました。二人には子どもはいませんでした。

二人は呉に戻ります。山の上の畑の隣の一軒屋、その周作の実家に連れてこられたシラミだらけの女の子、家の者たちは慌てながらも、受け入れて、さあ、まずはこの子をお風呂に入れなければ、となります。そして最後のシーン、すっかり暗くなった空に、薪風呂の煙突から、白い煙が上がってくるのです。それを遠景で空の上から描くのです。まるで、天からの、神様からの視線のようです。何と温かい視線でしょうか。人間が生きている、そのこと自体、どれだけ価値あるものであるか、この映画のラストの煙突の煙は、そのことを示してくれているように思いました。

【結】 私たちも、御使いと共に賛美する者に

私たちの「生」は、神様によって喜ばれているのです。例外はありません。自分で自分でつまらないものだと評価してはいけません。ましてや、他人が私の命を左右したり、評価したりはできないのです。

クリスマス、イエス・キリストは、この世界の片隅にひっそりと生まれて下さいました。それは、この世界の片隅に、今生きている私たちと共に生きるためにです。「見よ、私は世の終わりまであなたと共にいるのである」(マタイ 28:20)。正に、このことを告げるために、キリストは、今日、生まれて下さったのです。クリスマスは、神様の愛の決意の日です。そのクリスマスの夜、天がざわめきました。ああ、人間に対する愛が、本当に確かなものとなったのだと、私たち人間に先立って、賛美をしたのです。

さあ、私たちも賛美をいたしましょう！ この世界の片隅、ベツレヘムの馬小屋の飼葉桶に来て下さったキリスト、この方は、やがて、すべての人間の罪をその身に引き受け、十字架にかかり、しかし、私たちの永遠の生命の約束を果たすためによみがえって下さったお方です。今宵、私たちの心に迎え、賛美を捧げましょう。

お祈りを致します。

主イエス・キリストよ、私たちに命を与えてくださってありがとうございます。これがどんなに尊いものであり、あなたに愛されている命なのか、そのことをクリスマスの出来事から教えられます。どうぞ、天の御使いたちが私たちに先立って賛美を歌ったように、私たちの人生も、あなたへの賛美となることが出来ますように。

きょう、ここに集まっている一人ひとり、またそのご家族に天の豊かな恵みと、聖霊の導きとをお与え下さい。主の御名によってお祈り致します。 アーメン。